湛然の浄土教 ―承前―

講師　小林　順彦

中国天台六祖湛然（七一一―七八二）は天台智顗の忠実な祖述者であり、第一期暗黒時代と称された唐代における天台の中興の祖である。湛然は智顗の思想を継承しながらも、時代の背景も伴って独自の理論を展開し、後世に多大なる影響を及ぼした。ここで問題にするのは、湛然が阿弥陀浄土教をどのように理解していたかということであるが、先学の研究においては、湛然は智顗が三大部や維摩疏で説いた浄土説を更に一歩踏み出したという観点から、阿弥陀浄土を信奉する人物であったとするのである。その根拠は、（一）『摩訶止観』（以下『止観』）の中の常坐三昧で、行者が行法中の障りのために一境に専注出来なくなった場合、一仏の名を称することを許しているのだが、智顗が限定しなかったこの一仏を湛然が阿弥陀仏と限定したこと。（二）十方仏の名字と阿弥陀一仏の名号を称することの功徳が等しいとしたこと。以上の二つにより、湛然が浄土信奉者であるとの説は、ほぼ確定的にも等しい立場を与えられた。

しかしながら、果たして本当にそうなのであろうか。先ず先学が根拠とした（一）であるが、確かに智顗において不明確であった一仏を阿弥陀仏に限定したことは、湛然の学説においては重要である。湛然が限定したことによって、後世の学人の指針になったことは否めない。しかしこれは、諸経が多く阿弥陀仏を讃じているからそうしたということであって、湛然がことさら阿弥陀仏を選定せざるを得なかった積極的な意図は読み取れないと考える。続く（二）の理由では、阿弥陀一仏の名と十方仏の名を称える功徳が等しいから、阿弥陀仏は上席であるという。これも取り方の問題であるが、天台において仏名に上下をつけるという観念はそもそも無いのであり、方便として重きを置くのであれば、何らかの理由付けがあってしかるべきである。

そこで『法華玄義釈籤』（以下『釈籤』）を見てみると、ここでは浄土受報の因が説かれる。湛然は浄土穢土の受報の差を、持戒の緩急によって説明する。紙数の都合で概略を述べるに止めるが、『止観』二十五方便で説かれる戒（事戒）・乗（理戒）の緩（未だ持戒が十分ではない）と急（理想的な持戒）の四句分別を依用するのである。即ち智顗が、戒が急であれば安養浄土を得るとする説を承けて、『大智度論』で穢土とされる三界も、娑婆の三界ではなく、浄土に就けば摂せられるという。浄土穢土の受報は全く衆生の機根の熟未熟に依るという智顗の説と、実は何の変わりもない。

湛然は『釈籤』の中で『法華玄義』引用の『大論』に言及し、安養土に三界を接するか否かという問いに、安養国は三界を出ているからもはや三界ではないという『大論』の説を紹介しつつも、安養土側に立てば三界ありとして、智顗と同じく弥陀浄土を凡聖同居土として捉えていたこと

が知られる。

湛然は決して弥陀浄土をこの娑婆世界と隔絶したものとは見ていなかった。これは智顗が明示しきれなかった表現に、湛然は理論の補足を加え、智顗の説を論理的に明証しようとした結果に過ぎない。従ってこの湛然の解釈は、独自の浄土教展開というより、智顗の解釈の論理的裏付けを祖述者として行ったという立場を出るものではない。湛然が浄土教信奉者であったとするには、四明知礼のように明確に弥陀浄土教を以て天台学説を主張する説を、湛然の著述の中に見出さなければならないのである。